

白金葭

10月号



平成 30 年 10 月 発行

第 91 号

定例句会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

十一月十六日（金）第一コビアン大机・芭蕉忌、馳

十二月二十一日（金）第四正午～三時・白鳥、枯

一月十八日（金）第正午～三時・新年一般

兼題句参考句十一月十六日分（芭蕉忌、馳）

芭蕉忌にビルのガラスの絶壁よ

山口誓子

みちのくへ向く芭蕉忌の芭蕉の眼

〃

決めかねつ馳の仕業はたまたは

中原道夫

馳の路伸し切りの首伸しながら

中村草田男

十月例会句会報

（'18／10／19 7名欠3）

光成高志

下り築横たはる鮎跳ねる鮎

稠密な青落花生畑哉

山椒の実噛めばびりぴり口震へ

月読尊山椒の実の色づける

二十三夜塔ここにも立つて野菊咲く

増田陽一

大利根の草魚を残し下り築

熟れて墮つもののひとつに雀蜂

木更津へはや暮れ方の鶴千鳥

同じ木の揚羽は去りて実山椒

熱き湯に老躯煙りて蛾の声す

浅野正美

山椒の実取ることもなく色づきて
刺きらい裏庭に熟れる実山椒

紅葉も流れ着くなり下り築

留守の家に木守りの柿は頂に

少しづつ勢衰え百日紅

中川素子

昨夜の雨のあととの日差しに山椒の実

亡友の夢をつづれる夜長かな

押し車赤帽の子等秋郊をゆく

奥多摩の水分く岩場崩れ築

園児らの押し競饅頭天高し

松村幸一

山椒の実爆ぜしと告げむ妻は亡く

火恋しそれより恋し妻の膚

ムンクのやうに糸瓜が叫びたき時も

小鳥來ても言問ひかくる妻は亡し

栗剥いてゐる時に赤紙は来た

光 みち

産土やお斎の膳に山椒の実

鳥渡る人声したり五合庵

無患子の青き実ながら落つ屋敷

流れくるものに空缶下り築

下り築息絶え絶えの子持鮎

実山椒鄙より出でし大偉人

東雲にひとつ跳ねたる下り築

仲本興正

自転車のハンドルつかひ案山子翁

摺待の脇にひさぎて里のもの

ふる里はいつも幼年秋彼岸

田宮敦子

秋めきて碁盤に向う昨日今日

何時までも一緒にいたい草の花

何気ない子供の言葉山椒の実

堀の上の猫知らん顔して山椒の実

多摩川の流れ急なり下り築

飯田孝三

露の灯に別れの握手ふと長き

虚子庵へ急な石段柿日和

白鷺の岸に窺ふ下り築

白鷺の一枝に水の澄めりけり

山椒の実囁んでつくづくトワ・エ・モア

磯目健二

山猫も魚を拾ふ月の築

下り築簣の子通して流れけり

月天心川一筋に下り築

はじめみや実のはじけ散る山の寺
粉山椒振りかけ鰻の匂ひかな

武者昭七

下り築息絶え絶えの子持鮎

今月那珂川上流の下り築を見に行きました。この句の通り下り築に掛けた息絶え絶えの死の渕にいる鮎、息絶えて横たわる鮎、跳ねる鮎などをみました。下り築の必然を子持鮎で言いとめたのが佳句の所以です。

紅葉も流れ着くなり下り築

下り築は何でも流れ来るものを受けとめる竹の簣子です。紅葉の葉っぱも空缶だって何のその、私が見たのは向日葵の根っこ、果ては大流木が打ち上げられていた。でもやはり生き物を捕るのが築の本意なんです。那珂川での採捕の種類は鮎鰻鯉鮒桜鱒ぎばち蟹鯰にございわうぐいかわむつかじかかまつかと書かれてあつた。

正美

みち

一句鑑賞

光成高志

昨夜の雨のあととの日差しに山椒の実

素子

昨夜の雨のあととの日差しに山椒の実と書いてその他のことを省略してある写生句です。夏に青い実を収穫するので秋の今頃は熟れて皮が爆せて臍脂色の実が露出します。栗の爆せるのと同じです。この実の効能などは言わず、客觀描写に徹したところが句を強くしています。

一句鑑賞

増田陽一

幸一

ムンクのやうに糸瓜が叫びたき時も

糸瓜は明治以来多くの俳人に愛され「俳趣」のあるものとされている。多くは「月並」の弊を免れないところだけれど、また子規の臨終の句が連想されるときは「叫び」にも結びつくであろう。掲句はムンクの名作「叫び」と結びつけたところ、天才的な閃きではなかろうか。「叫び」の絵には幾つもヴァリエーションがあるけれど、そういう言われれば人物のフォルムがみな糸瓜に似ている。單なるユーモアではなく、糸瓜は市井の平民の表象ではな

つややかに大和国原柿日和
まんじゅしやげ柿泥棒が勢揃ひ

踏み分けで行く花野の果ては広い海
施設訪ふ手にする花は野辺の花
下り築掛け終えて叩く腰の骨

かろうか。それが叫ぶときはマンクの絵の如く、夕焼け雲に届く絶叫であるべし、と言うのであろうか。

山猫も魚を拾ふ月の築

健二

山猫、と言うからには日本では対馬か西表島であろう。いづれも原生林の深い孤島である。西表では車道の所々に「山猫飛び出し注意」の札があつて島民が保護している。「も」拾ふの表現で山猫の密かさが出て居るし「月の築」は更に良い。この「月」によつていま天然記念物で絶滅危惧種の山猫が照らされ、原生林に築を架ける村人と共存する自然が神秘的なまでに映像化される。

露の灯に別れの握手ふと長き

孝三

灯は街灯か、「露」に人生会うも別れるもの夢なさがある。握った手をすぐ離せぬ別離の感情が「ふと長き」というさりげない表現に凝縮されている巧みさが見事である。連想するのは、鈴木六林男と佐藤鬼房が中国の戦場で一夜出会つた後の吟である。「会ひ別れ霧の闇の跫音追ふ 鬼房」「会ひ別る上嶺都市の夜の霰 六林男」偶然両大家の感情が一致し句がよく似ている。

稠密な青落花生畑哉

高志

千葉県の名産、特に八街やちまたは有名である。落花生はまだ青い。そして豊作が約束される稠密な緑に作者は感動しているのである。やがて成熟の晚秋となり株は畑に積まれて茶色になるまで乾燥される光景がこれまた名物

となつてゐる。

鳥渡る人声したる五合庵

みち

五合庵は良寛の住んだ遺跡で有名だ。粗末な庵であるけれど、良寛をしのぶ村人が修理し伝えてゐるのである。普段は里山の寂れた庵にふと人声がする、というところに更に閑寂な情緒を感じる。そして五合庵のある越後国上山の上空は大陸からの渡り鳥の道でもある。

小名木川・中川番所跡界隈吟行句会報(18/9/28 6名

光成高志

公園の草刈り跡は草の波

水底の鯨に釣糸垂らし釣る

スカイダック中川下る水の秋

笹舟を作つて浮かす秋の水

水澄むや豊かなる水小名木川

番所橋潜れば対岸初紅葉

木斛の実の色づける川の駅

常陸石岡の酒樽を積む高瀬舟

光
みち

日陰なき川添ひの道曼珠沙華

神前に水溜りあり水の秋

にはとりの声して番所秋の朝

鯉釣れて赤きバケツに泳ぎをり

釣糸の岩に引かかる秋の水

まゆみの実今は桃色塩の道

寛永通宝白紙に並べ秋深し

秋の日に日差す横顔芭蕉像

開運の親子なで牛まゆみの実

鯿飛ぶや水上バスに追はるごと

秋の川芭蕉の句碑の文字褪せて

大江戸の昔を今にはぜの竿

秋日和川面ゆらめく小名木川

川沿ひのむくげは風にさからはず

石垣に手をあててみる秋うらら

川二つ交はるところ曼珠沙華

佐藤宏之助

秋の蝶万象に影落し飛び
美しき鯿の回遊始まれり

天高し芭蕉優々せし運河

船番所跡に紅白曼珠沙華

秋の潮満ちてとどまる小名木川

藤の莢日差し届かぬ陰にかな

船番所廁に野菊飾られて

無住寺の墓地に整列曼珠沙華

釜田敬司

林半寿

塩の道てふ川筋に草の花

叢芭蕉翁像の太き筆

だうだうの尺余の鯿の泳ぐ川

檀の実未だ色薄く彈けざる

鯉釣りの夫婦一間ほど離れ

蜻蛉飛ぶかつて名代の濁り川

船番所鯉釣る人の両岸に

水の秋定規で引いたやうな川

加倉井たけ子

稻荷社に親牛撫牛豊の秋

水澄むや素速く動くハゼの群

境内に芭蕉の坐像木槿咲く

釣り上げしハゼの胸鰓透き通る

病葉のたゆたふ小名木川遲遲と

藤の莢垂れしベンチや小鳥来る

境内に古りし柏大鰐雲

木斛の実の日を弾く小名木川

吟行録・貞享四年（一六八七）八月鹿島に赴いた芭蕉が通った小名木川、その東端の中川番所跡まで歩く吟行である。思い起せば、その西端が深川番所であり、芭蕉庵のあつた所だ。芭蕉は鹿島詣の時そこから船でこの中川番所を通り行徳で船をあがり木下街道を歩き布佐に出て利根川を舟で下り鹿島の根本寺での月見に出かけたのである。江戸名所図会の小名木川五本まつには芭蕉の俳句と月見船に芭蕉らしき人物が描かれている。その五本松は大島に近いところで、「川上とこの川しもや月の友」と

詠んだのは千那が川上でこの月を眺めている筈だという挨拶句である。私は平成四年に両国から小名木川北の新宿線添いに歩き船堀橋を渡り行徳、本八幡、鎌ヶ谷と歩いた。ほんとは木下迄行くつもりが腰に来て断念した思い出がある。宏之助さんは大島に早く来て北上、堅川から引き返したとか。興正さんを待つたが来られないのでも丸八通りを小名木川まで南下、稻荷神社の芭蕉像を見た。ここに「秋に添て行ばや未は小森川」は門弟桐溪方にてある句が書かれてあつた。これはこの川に添つて秋景色を訪ね、未は小松川まで行こうよの意であるから、この日の我々の吟行行程にぴつたりである。神社の前の階段を下り、小名木川沿いの遊歩道に出て、そこからひたすら川上に歩き旧中川に合流するところまで来た。ここに番所跡には江東区の資料館があつて当時の再現ジオラマを中心と資料を展示しており、一階には広い会議室があつて借りられる。句会場はここに予約しておいた。資料館外の旧中川岸は整備されて公園風になつており、鯉を釣る人々が竿を垂れている。よく見ると水底に鯉が結構沢山泳いでいるのであつた。ここまでの中川添いの道々には曼珠沙華、檀の実、しもつけ、白丁花、露草、藤の莢、木槿などが返り咲いていたが、鯉釣りを見て皆懐かしがつた。宏之助さん半寿さんを置いて小松川公園を抜けて駅前のジョナサンで昼食後、資料館に引き返し

・ぬくめ酒会はねば淋し会へば憂し

あき子
とみた

鬼の子の故由を訊く括り萩 (外道丸)

野分来る國上の坂をせわしなく

吊り橋や色なき風の奥処

國上寺の利益のある秋の蚊か

・糰殻の燻つてゐる星月夜

初紅葉登りつめたる國上寺 (ハシヨウザイ)

潮田幸司
つわや
みち

まゆみ

・谿底は知らず一声残る虫

光
みち

事前投句大賞 (賞金五万円) の「仏教の伝はる速さか

たつむり」について冒頭に中原道夫さんの選評あり。

曰く「仏教はござんばいの五三八年伝来してそれ以来

未だ伝え来つてゐる。その速さはかたつむりのごとく

いやもつとゆつくり伝わつてきたものだ。考へても見

よ。ブッタガヤで悟りを開いた釈迦が初めてそれを

人々に話して聞かせたサルナートから延々天山脈を

越え中国から朝鮮、日本と伝わり日本列島をかたつむ

りの速さで伝わり広まつたのだ。インドのベナレスに

もサルナートにも私は行きましたよ。かたつむりの速

さという氣の利いたことを言つてしみじみ感が出てい

るし、仏教伝来の速さをコンパクトに言つてくれた喻

が面白い云々」その他、入選句4句、佳作の内出席者

の句について講評があり、最後に投句作品のみちさん

と私の句について特別に講評があつた。ちよいと氣に

なつたことを敢えて書いておく。「ほとゝぎす法会の斎のレトリック」について、レトリックは *rhetoric* というギリシャの雄弁術の意味であつて対話術 *dialectic* の対句として用いたのだが、このような言葉の作は良くないことをあらためて知つた。これは無理筋であった。最後に中原さんのお父様が育てられたという無花果を手すから頂きました。

*木戸敦子さんから喜怒哀楽百号が送られて來た。以後は無料で配布するとか。その意気やよし。98歳の伊丹三樹彦さんから祝句「百年千年喜怒哀樂は詩歌の素」が大袈裟ではないのはその名前のお陰である。これで敦子さんは社の名前に不服を言えなくなつたね。以上は蛇足。俺たちのまのあたり句会の取材記事を丁寧に書いて掲載しているのが圧巻である。中原道夫、榮猿丸、関悦史、高柳克弘 4人の氣鋭の若い俳人の席題俳句の選評を載せている。薔薇と捨つ我が血の付きしガラス片 (克弘) はガラスの席題句、文鳥は愛撫を拒み秋時雨 (克弘) は撫の席題句、赤とんぼ手配写真みな友の如し (悦史) は友の席題、津波映像予告テロップ撫子映し (猿丸) は撫の席題句、グーグルにエロ・グロ・神ゴッドななかまど (克弘) はグーグルの席題句であり、以上が 3 点 2 点句である。1 点句は 7 句ある。選評が終わつたら受講者 46 名が事前投句した兼題月

の句を選び講評する。会場からの質問にも答えながら俳人たちの人柄に触れつつ、砂ならぬ言葉のシャワーに浴するお得な3時間、あつという間のまのあたり句会でしたと敦子さんが締めくくっている。（敦子さんの取材記録正確に書かれているように思います。グーグルの句を作つてみようと私も挑戦しましたが、夢うつつにも考え考えましたが、できませんでした。今力任せに思いついたのは「グーグルにストリートビューあり道をしえ」とか「グーグルが居た公文書図書館に」とかですが駄目ですね。中原道夫さんも往生したらしいから、私なんか出る幕はなしです。ただ言いたいのは皆さんまだ若いのだから、私が今読んでいる栗田勇さんの芭蕉ぐらいは空読して作句されたらいかがですか。）

受贈誌（平成30年10月号）

一湾を埋む白波秋立てり（彩143号）

平野ひろし

つくづくし限界集落五軒のみ（リ）

リ

限界集落仙人草の花盛り（リ）

リ

鮮血の色山畠の鶏頭花（リ）

リ

太陽湧き立つ黄色花ミモザ（リ）

リ

五分搗きのばら撒ける米花南天（リ）

リ

輪唱のひびける学校雲の峰（リ）

リ

さやさやと葉裏そよがせ青田波（リ）

リ

誰も居ぬ居間で首振る扇風機（リ）

渡邊由美子

遠藤恵子

木村恵子

稻垣節子

渡部和夫

山崎幸子
奥津駒子
璃子

よく見ればこんなに綺麗茄子の花（リ）
胡弓の音坂の八尾の酔芙蓉（リ）

山崎幸子
奥津駒子
璃子

東京クラブ（10月号）

腹抜かれ見劣りしたる秋刀魚かな

万世遊

笑栗や寺と農道境なし

晴夫

波音追ばれ棚田に稻刈りぬ

万世遊

朝寒や図書館司書のミニバイク

理佳江

手にあふれ仙石原の草の花

理佳江

秋空の秩父山陵雲走る

山尾かづひろ

落人りに秘匿の囮鮎（あすか十月号）

光成高志

東大の赤き領巾立つ蓮の群（彩143号）

理佳江

山尾かづひろ吟行ノート10月（戸隠高原）

光成高志

道辺の朝顔垣に絡まる共稼ぎ

光成高志

実の朝顔垣に絡まる共稼ぎ

光成高志

秋天に楓大樹が枝を張る

光成高志

芭蕉のかるみ以後（47）

光成高志

秋の朝顔垣に絡まる共稼ぎ

光成高志

芭蕉のかるみ以後（47）

光成高志

七月号の（46）では天和二年冬、伊予松山の俳人が送

つて来た歌仙一巻に讚を添えたことを書いた。欧阳修と

莊子から引用した芭蕉の讚文を丁寧に書いた。明けて貞

享元年は甲子の年、西暦一六八四年である。芭蕉四十一

歳、旅の人生を始めた年である。千里を同伴して九年振

り第二回の帰郷の旅に出る。単なる所要の為ではなく、

西行敬慕の文学目的の旅を目指したのだ。この芭蕉より早く二月には基角が吉野旅行に出て宇治・鞍馬に遊吟しており、井原西鶴は住吉神社にて独吟二万三千五百句の大矢数を催して、旅行中の其角がその後見に加わってい。芭蕉の旅立ちの一か月前の七月には基角は京都に於いて、僧只・丸・伊藤信徳・櫟虛中・大原千原との五吟五歌仙五巻、及び井狩友静・向井千子・青木春澄を加え、八吟世吉一巻を試み「蠹^{くず}集^{いもし}」を編んだ。蠹の難しい漢字の音読みはとなので、と集と読むのかもしれない。基角が加わったいかにも術学的連句集であつて「一寸読んだけだが虚栗の世界を抜けていなし、後世に名を成していなし。芭蕉が野ざらし紀行の旅に発つたのは八月であり、その紀行文の冒頭からしていかに伝統的和漢の詩歌を踏まえて、一語一語が相互にひびきあって、果て知れぬ無限の広がりを孕んでいるかということは後世の研究家によつて語られ実証されているので、ここで私が先行研究をなぞつても新味はない。そこで私流に「冬の日」五歌仙から読み取つた宇宙觀のようものを書いてみたい。この旅の帰途名古屋に立ちよりこここの風士らにとどめられて彼らと唱和した連句 36 歌仙の五巻がそれである。こがらしの巻の発句は、長いまえがきがついている。笠は長途の雨にぼろぼろ、帯衣かみこほとまりくのあらしにもめたり。侘つくしたるわび人、我さへあはれにおぼえける。

昔狂歌の才士、此國にたどりし事を、不圖おもひ出て申侍る。
狂句^こがらしの身は竹齋に似たる哉

芭蕉

笠は長途の雨にぼろぼろ、紙の衣は泊り泊りの嵐に揉まれちやつてぼろぼろになつた。侘びを尽くしたわび人の我さえあわれに思われる。昔竹齋という狂歌好きの藪医者が名古屋に來た時つづれ紙子に紙頭巾、取りさがしたる姿にて、さながら鳶が身震いして風に吹かれしきと様子を不図思ひ出して申し上げます。先に書いた谷木因の桜下文集には歌物狂二人木がらし姿かな（木因）があり、又嵐雪に「木がらしの吹ゆくうしろ姿哉」があつてこの時の芭蕉が詠まれている。木因の狂句と竹齋の狂歌を重ねて名古屋の連衆に披露している。俳諧の笑い滑稽を打ち出しおのれ自身を別の自分が見つめている、即ち自らを戯曲化することによってはじめて見えてくる狂の心境を示したのである。この狂は狂氣をいうのではなくものが人に憑りついて神がかりとなつた状態をさすつまり己を四季折々の狂句を売り鬻^{ひさ}いでまわる句商人^{くあきんど}に見立てて其生き方を謳歌しているのだ。沈痛な孤独感ではなく、飄逸な無心の人間連帶へ目を向ける軽みが自覺されはじめたのである。現代的に意訳すれば、木枯らしに吹かれてよれよれになつた衣を着たみじめなわたくしは狂句を商いあるくあの竹齋物語の竹齋に似ちやつたものでござりまする、と啖呵を切つてゐる

ようだ。竹齋に似たるは直感的に思い付いたのではない。延宝八年の「花にやどり瓢箪斎と自らいへり」があるし、天和元年には「侘びてすめ月侘斎が奈良茶歌」があつて自らを架空の瓢箪斎とか月侘斎と戯れて自らの雅号を作つてゐる。ここで実在の人物に寓するのはお手の物と云つたら言い過ぎであろうか。

たそやとばしるかさの山茶花

野水

挨拶の発句にたいする答礼の脇で、客の風雅をほめる意味をもつて仕立てた句。たそやといふのは誰ぞやといふ意味で、山茶花の散りかかる風流な笠を着て居られるのはどなたでしようかの意。発句の竹齋に似ている人ですが、こちらから見たら誰でしようかとたずねる形にしたのだ。天和二年の憶「老・杜」の句「鬢風ヲ吹て暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ」の秋思の杜甫を思いやつて誰が子ぞと尋ねる形と同じだ。今日書きたかったのは他でもない、「冬の日」の最後に

水干を秀句の聖わかやかに

山茶花匂ふ笠のこがらし

野水

とあって、この竹齋の発句と山茶花の脇に通う句にして侘びたるさまを潔くつくり、二句にて祝賀の意をこめたるにや、一集の終りなればなるべし、という秘注があることである。水干といふのは糊を用ひず水張にして乾かした絹の狩衣のことであるから、紙子ではなくいい衣

を着けた秀句の達人の姿がいかにも若やかで立派だとうのである。発句の紙子もめたる狂歌の才士に似たる哉と自らを狂句を好む芭蕉に對して秀句の聖としたるにや、古今集の序に、柿本人麿なん歌の聖なりけるとあるにより秀句の聖なりけるといへるなるべし、と六十年後の附合考に書かれてある。ここは五歌仙の巻末の花の座なれば、その局をここに結ばんと風雅の実情をつくし門人の尊敬をあらわした。貞徳の時代本式の俳諧には烏帽子大紋にて出席せりと、木枯の身を若やかと転じ、山茶花と笠とこがらしと挙句に結んで五巻一連環をなせりと標注にあるのはよく納得できる。この一連環となす書き方は野ざらし紀行の本文にも奥の細道にも見出されるもので、これを私は芭蕉の宇宙觀と呼びたい。循環系は連句では当たり前の形式ではないのか。本文の「三更月下無何に入と云けむ」の無何は莊子逍遙遊篇に云う「無何有之鄉・広漠之野」を指す。このくだりなどを先の記念号では急ぎまとめたので随分乱暴に書いてしまつた。これは自覺していたので、ここからじつくり考えていくたい。古池やの名句が出るのもこの旅の後である。

読書余録 一吉川幸次郎一

磯目健二

半世紀以上も前、大学を卒業して入社試験の面接に臨んだ。正面に座つた専務が、私の卒業論文の典拠文

献について細かく質問してきた。そればかりか、いかに原典が重要かまで論じて肩を聳やかした。なぜ、それほど専務が一介の学生の参照文献のオーソドキシーにこだわったのか、長く疑問だった。しかし、近頃、吉川幸次郎の著書と幾つかの荻生徂徠の評伝を読んで、その理由が初めて分かった気がした。幕府の学問所聖堂昌平黌を本拠とする林羅山の朱子学が観念的・演繹的な倫理学であるのに対し、荻生徂徠の古文辞派や伊藤仁斎の古義派は古典の原典を徹底的に追求して真義を客観的・帰納的に探る考証学であった。その徂徠や仁斎の学風を承継するのが京大支那学の泰斗狩野直喜で、さらにその衣鉢を継ぐ高弟が吉川幸次郎であった。竹之内専務は京大で吉川幸次郎教授に師事している。執拗に原典を質問したのは、京大古文辞学の大先生からの師承のあらわれだったのだ。事実、専務にとつて師の吉川教授は、終生渴仰的であり、社ではその著作を多く出版し、ついには三十巻にも及ぶ全集ばかりが遺作となる未完の大作「杜甫詩注」の刊行にも力を注いだ。そのため、本人は素知らぬ顔をしていたが、東大閥が主流の経営陣にあって、京大偏重として反感を買い、ひそかに冷眼視されていたようだつた。だが自ら士大夫を任じても書生的な理想主義者の多かつた経営陣に伍して、観念論でなく鋭敏な時代的感覚と実

践的行動力で、専務は社業を支えるのに孤軍奮闘していた。実業家の資質ばかりでなく、若いときは文学活動で野間宏らと共にし、創作では芥川賞最終候補とまでなっている。最後は社長までなつたが、追われるよう辯職してからは、次々に著作を発表して、いずれも世評高く版を重ねている。その生涯は反朱子学的で陽明学にも近い知行合一の合理主義で一貫していた。閑暮も高段者で、死去するまで私たち後輩を相手に合宿を共にして対局を樂しんだ。酒をこよなく愛し酔うと多弁になり毒舌を放つたが、個人攻撃や愚痴めいたことは一切漏らさなかつた。先師譲りの文雅さを秘めた人柄で、今でも懐かしい大先輩である。吉川幸次郎は師匠狩野直喜に師事して中国古典語学や解釈学を深め中国語にも精通して、昭和三年二十六歳のとき、選ばれて中国に三年間留学した。北京の大学で聽講する傍ら各地の中国学者を歴訪し、当時の大家と一切中国語で不自由なく交流を重ねた。留学生というより対等の学者同士という趣きで、鷗外や中村真一郎などの描く江戸期日本の儒者の交流風景を見るようで、それは「遊華記録 わが留学の記」に詳述されている。弁髪こそしなかつたが、清服を着て中国語ペラペラなので現地市井では中国人として遇され、帰国後も中国服で通したことは有名だが、中国蔑視の風潮のあつた当時

では異色のことであつた。中国語を自家樂籠中のものにして、訓読でなく原語で中国古典を再解釈した徂徠のいわば現代版ともいえる姿勢である。言葉の原義を追求し、言葉を鍵として時代の思想・社会の成り立ちを客観的に明らかにしようとする清学古文辞派の影響は、徂徠、仁斎にさらに本居宣長にも及び吉川幸次郎にも至つてゐるのを知るとき、私は感動を禁じ得ない。吉川幸次郎に『読書の学』という本があるが、その中で深い言語体験としての読書の意義を説き、本はいちいちの言葉の味をかみ分けて読まない限り、読んだことにならないという先師狩野直喜の言葉を記している。その具体的実行例は未完の遺作となつた『杜甫詩注』にみることができる。そこには不世出の大学者の学殖のすべてが傾注されて詩聖の言語世界の視野を新しく切り拓いている。「私は杜甫を読むためにこそ生まれた」と言い切る吉川幸次郎の到達点を示している。これこそ眞の学問であり、眞の学者というべきであろう。浅学の私には到底盲人撫象の感を免れないが、文学における言葉の意味を改めて考えさせられたことだけでも、大きな収穫だった。(2018/10/22)

お便り広場（到着順、敬称略）

白金葭受取ながらもつ何日になるのかいろいろと忙

しくしていて返礼おそくなりました。九月一十月畑の作物や稻の刈り取りなど休む間もなく元気で働いています。ご安心下さい。九月十五日誕生日で米寿という歳になりました。この歳まで元気で動けることに感謝の毎日です。そちらは如何ですか変わりなく元気でいるようですね。あまり無理せずゆっくりやりませう。

(108 健三)

九月号を頂いてから急に涼しい一日があるかと思うと真夏日やらモタクしている中にお彼岸の墓参やら細々と雑事に追われ失礼いたしておりました。透き垣を越えて並んで蓼の花（高志）例の桜タデ（大ダタデ）ではないか。今年も見事に咲きましたが台風二十四号のお裾分けのような大風でやられました。夏の花の少ない頃の最後を飾つてくれました。十月「山椒の実」楽しみです。（10.9 瑞子）

白金葭ありがとうございました。朝夕はすいぶん寒さをかんじられるようになりましたね。こちらは今日は秋祭です。田んぼももうすぐ稻刈りが始まります。今広島も福山もだけどカープの優勝で沸き返っています。デパートもスーパーもカープカープ広島カープの歌が流れ店員さんは赤のユニホームです。老人会のカラオケに行つても最初に皆でカープカープと唄います。皆で日本一にならないと・・とおしゃべりしながら帰ります。自然に年令も日常の苦も忘れて楽しいひと時です。今年こそは日本一をと老いも若きも応援しています。あれこれ人に

誘われては出かけて毎日いそがしく暮らしています。大切な家族のために元気で夕ご飯の作れる事に感謝しながら夕方早くから作っています。ラジオ又民謡のテープを聞きながらです。この間も夕方来客があり「まあ一樂しそうなーな」と笑われてしまいました。(中略)
もう若くないので高志さんも敏子さんも無理せず身体には気をつけてがんばって下さいませ。白金葭を読むとほんとうにたいへんな事をしているのだと思います。お元気で

(10.14 幸子)

高山れおな選「獺祭忌クリップ輪ゴムホツチキス」こういった俳句ってどうなの、と独り言です。大正生れでお固く育ち中々はみ出しができませんでしたが、大抵のことに驚かなくともたまにはいろいろあり言葉の問題にはいつもイカツテいます。最近は半端ない、が腹立たしいです。「ほんぱじやない」とか「半端ではない」の真中をとぼし、今や公用語化している。はみ出るよりもが好きな私など用済みの世でしょう。今の秋の私の庭の景、秋明菊、秋バラ、つわ、秋海棠、野こん菊、何種かの小菊、コスモス一鉢、さくらだて、椿、ピラカンサ、サフラン、咲いているもの、つぼみのものなど色のあるものは右のとおり、素人の剪定の木もいくつか春より秋が好きです。十一月の白金葭もう十月と思っている中に霜降で秋も終り、十一月立冬でもう冬になるかと思うとこの一年モタ

く過ごして終わること間違いないです。この頃思うことは、日本人って、何でもこんなに熱くなる人種なのかもしれません。歌手の隠退角力の親方のモロく、スポーツ界のゴタくTVのチャンネルはどこをブツシユしてもこれら問題を毎日の如く繰り返しもう沢山でした。政治に関しても一般人は思う事沢山あつても芸能関係ほど熱くならず、デモなどもお隣の国のようになく秩序を保つて整然たるものです。そんな中でとりあえず衣食住を普通に俳句仲間と交流あり老人会も一つだけ出て、○をつけるのに主婦が無職か迷いつゝ、植物動物を愛しこぢんまりゆつたり暮したいのに何かと余計なことにおせつかいをし、忙しい日を送り自分で墓穴を掘った後悔しきりです。どんな姿になるでしようか。手書きの会報いつもお取り上げ下さいましてありがとうございます。酉の市今年は三の酉まであり、寒さも増して参ります。ますくお身体おいとい下さいますようお願い申し上げます。ごきげんよう。

(10.15 琉子)

前略すつかり秋めいてまいりました。お元気で、活躍だと思います。今回も所用のため投句のみとさせて頂きます。よろしくお願ひいたします。

(10.15 昭七)

白金葭9月号の、高志さんの「足跡マップ」が面白くてしばし眺めました。全国各地離島にまで足跡を記して居られますね。実に貴重な体験に違ひなく、追想の句は

いくらでも作れそうですね。小生このあいだ東大博物館での「昆虫展」を見ました。著名な採集家の標本が収蔵されており、例えば微小な蟻の全種類を整理した箱が天井に届く迄、偏執狂的情熱のここに極まる、といった展示に目くるめく感動を覚えました。高志さんもお元気な割には病院とは親しいというお話をしたがご健康を祈ります。それではまた。

我孫子日記

(10/22
陽二)

9/21	例会
9/22	
*	源氏物語聴講
9/24	
*2	良寛俳句大会
9/25	喜怒哀楽訪問
9/26	SOA
9/28	
*4	小名木川吟行
9/29	認知症検査
10/2	北総病院
10/3	SOA
10/5	
*5	下り築取材
10/7	亀有
10/10	SOA
10/16~18	検査入院
10/19	例会

編集後記

今日は中原道夫さんの句会に出又俺たちまのあたり句会の記事を読んだことが一番印象に残った。10頁の9歩の文が私の感想です。璃子さんの手紙の通り私も同感です。俳句はぶつきらぼうでいいと誓子先生に教えられたのであいう句はとてもできない。芭蕉の軽みは道元の正法眼藏を通らなければならないと気づいた。一寸齧つたが難解でどうしようもない。芸術は長く人生は短しですけれども、今読んでいる栗田勇さんが道元にも芭蕉にも最澄にも明るい方なので、精読して古人の求めたものをつかめればいいと思っています。

白金霞十月号(通巻第九号) 平成三十一年十月二十五日発行

編集・発行人 光成憲志 発行所 二七〇・一二一九 我孫子市南新木二一四一七
表紙の題字・加納綾女 同写真は平成三十一年一〇月二二日の白金霞

- *2 鰯雲 檻桜の30年
- *2 コンバイン制御の農夫直立す
コンバイン橋の上にて洗はるゝ
秋彼岸人形供養の轍立つ
- *3 笑顔よき乙女手を振る百日紅
B型の夫なりとや秋の雨
- *4 繡線菊が河畔の道に返り咲く
菖蒲の宿に戴く菊臉
- *5 目高ほどの鮎も混じりて下り築
干蒜を所望したれば道草あげび付け

(みち)
(リ)